

尾本恵市教授ご退官にあたり

平井百樹（人類学専攻）

尾本恵市先生は人類遺伝学を専門とされている。主として血液の遺伝標識にみられる変異を電気泳動法により検出し、集団の遺伝的系統関係を調べるご研究である。アジアの孤立諸集団を研究対象とし、膨大な研究をされたが、中でもフィリピンの山地でいまだに狩猟採集生活を行なう低身長で黒い皮膚色の「ネグリト」の起源に関する調査・研究の成果は世界的に高く評価されている。人類学研究者をフィールド調査型と実験室型に類型化することがあるが、先生は両方にまたがる行動する実験研究者である。ジープでまる1日走って辿り着いたモンゴルの調査地のことや、フィリピンのシラマドレ山脈を整備不良の軽飛行機で越えられたことなど、冒険譚に事欠かないが、このようにして実際にご自分で野外調査し採取してきた試料について実験をされた。それだけに実験結果をもとに構築される先生の人類の系統関係に関する説には説得力がある。近年DNA多型のデータも加えられ、いま隆盛の分子人類学の日本での基盤を築かれた。

永年ご指導を仰いできたものとして先生の定年退官を迎え感慨深いものがある。四半世紀も昔、私が人類学教室の遺伝研究室に出入りするようになった頃、先生の研究室は2号館地下にあった。暗い階段を下りると研究室前の廊下には大きな舟の民俗標本などが置いてあり、その傍に遠心機やフリーザーが置かれていた。何かすえた臭いがしたことを覚えている。そこはかつて土器などの標本室だったと聞く。先生が人類遺伝学を志された頃の人類学教室では、遺伝学的な研究はほとんど行なわれていなかった。当時よく教室を訪れた日本の人類学の先達からはそのような研究が批判的に受けとめられていたようである。先生はミュン

ヘン大学に留学し、西欧諸国の人類学・人類遺伝学の動向を見られ、帰国後この研究室を整備され、血清蛋白や血球酵素の遺伝標識を用いた集団レベルでの研究を始められた。のちに研究室は3階に移り、人類学専攻に進学する院生の半数は何らかの形で遺伝学的手法を用いた研究を行う状況にまでなるのだが、その基礎はこのようにして築かれた。当時先生は長身を実験机の上にかがめ、電気泳動用のゲルに小さな濾紙に沁み込ませた血液試料を横一直線にアプライされていた。その泳動像はきれいなものであった。

先生はとても器用である。実は、先生は蝶の収集家としても一流である。キチョウ類の標本を見せて頂いたことがあるが、すべて対称的な形の良い展翅が施されていた。ある調査地でのことである。昼休みに荷物の中から折畳式の捕虫網を取り出され、叢に入っていかれた。しばらくたたずみやがて静かに網を振るとその中には蝶が入っていた。先生が採集される姿を見るのは初めてであった。私は、先生が猛然と蝶を追いかけ、強引に網を振り回して仕留めるというスタイルをとられるものとばかり想像していたのでこれは意外であったが、納得もした。多分よく状況を観察され、蝶の習性などを考えたうえで飛翔する道筋で捕獲の時を待っておられたのである。研究でも情報を周到に集め、ここぞというところを攻める。海外調査の成否は、調査対象の選択ばかりでなく、気候、人脈、そして時には調査費のやりくりに必要な円交換レートにまでもかかっている。先生の場合は、全てのタイミングが良く調査はいずれも成功裡に行われてきた。それらは生来の勘と運の良さもあるが、やはり該博な知識と周到な準備と決断力によるものである。こうして上述のようなネ

グリト調査の成果は挙がった。

調査地でご一緒して感心するのは、現地の研究者を支援し、若い研究者を育てるべく努力されている点である。調査後に先生のもとで研究をするため来日するアジアの学生も多い。それにしても、小教室にあって公務も多忙をきわめるなかで、常に研究のリーダーとしてここまで来られたことは大変であったものと拝察する。数年前の一時期、少しお疲れのご様子がみえた頃があるが、どうも後進の我々が至らぬために先生にご心労をおかけしているのではないかと思ったものである。先生は多くの弟子を育てられた。それぞれに

いろいろな分野に展開して活躍しているが、これまでは先生を中心にして大きな求心力とそれに比例した遠心力とのバランスが保たれてきた。この状況を保つにはまだ先生のお力添えを必要とする。東大退官後も京都の国際日本文化研究センターの教授を務められる。近く中国雲南省にもでかけられると伺った。先生は人類の全体像が語れる人類学者であると私どもは尊敬する。これまで30年の永きにわたり東京大学において研究と教育にご尽力されたことに感謝し、先生の今後のさらなるご活躍を祈念する。

